

アル・ファイサリア

慎太郎は、インターコンチネンタル、シェラトンなどと並ぶ、リヤドの超高級・五つ星ホテル、アル・ファイサリアの一室で目を覚ました。

気が付くと、超高級ホテルらしく、大人三人はゆうゆうと寝られるであろうほど大きなキングベッドに横たわり、軽い、感触の良い羽毛布団にくるまれていた。

リヤドに着いた昨晚は、長旅だったし夜も遅かったので、チェックインすると早々に寝てしまったが、時差ぼけのせいもあつたのか、目を覚ました時間は午前三時だった。

慎太郎はそのまま心地良い寝具の中でまどろんでいた。すると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。最初はおっくうで無視したが、二度、三度と続いた。

慎太郎は仕方なく眠い目をこすりながら起き上がり、ドアに向かった。

ドアの小さな覗き窓から見ると、あのナセル前石油相の秘書官アブダラーが、白いトープを着て笑顔で立っているのが見えた。

慎太郎はドアを開けたかどうかは定かではなかったが、アブダラーはいつの間にか部屋の中にいた。今は、遠く紅海岸の都市ヤンブーに転勤になっている筈なのに、一体どうして、しかも、こんな時間に、ここに……

そう思ったが、とにかく、久々にアブダラーに会えたのが嬉しかった。

そして、握手をしようと手を差し出すと、アブダラーも手を差し出した。

よく見ると、その掌の上には小さな赤い小箱が乗っていた。

その小箱の蓋が開き、中から、金、銀、それにダイヤモンド、ルビー、サファイヤ、エメラルド、アメシスト、オパール

ルと無数の宝石が続々と飛び出して来て宙に舞った。

空中に広がったそれらの宝物は、赤、青、緑、黄、白と、色とりどりにキラキラと、眩(まばゆ)く輝いていた。

気が付くと回りには、宝物と同じように光り輝く、瑠璃(るり)、琥珀(こはく)や水晶などで出来た花々が咲き乱れ、甘い芳香を漂わせていた。

ちよつと先には、清浄な水を湛(たた)える池があり、池の底には純金の砂が敷き詰められていた。池の中央には噴水があり、水が高々と吹き上げられている。

まるで極楽浄土のようだった。

やがて、どこからともなくアラブの音楽が聞こえてきた。

ウード(アラブの弦楽器)、バイオリンがメロディーを奏(か)なで、タブラ(小さな太鼓)がリズムを刻む。タブラのリズムは徐々に激しさを増して行った。

アブダラーがニヤリと笑うと、急に全ての宝物が茶褐色の石油に変わり渦巻いて慎太郎の方に流れて来た。慎太郎が慌

ててよけようとすると、それらは無数の鮮やかな黄色の蝶に変わった。

次の瞬間、真っ白なトープ服を着たアブダラーは両手にアラブの剣をかざしていた。彼はそれを大きく揺らしながら、蝶の群れの中で、ゆったりと踊っていた。

やがて、アブダラーは持っている剣を頭の上に載せると慎太郎に向かって微笑みかけた。

すると、突然、アブダラーの姿は霧散し、剣の下には妖艶なベリーダンサーがいた。

彼女は、昨晚寝る前にテレビで見たレバノンの女性歌手、ハイファ・ワハビにそっくりだった。

そのベリーダンサーは剣を頭の上に載せたまま慎太郎を誘うようにアラブの音楽に合わせて腰、腹をくねらせて踊っていた。

ビーズが縫い付けられたピンク色の小さなブラと腰骨の

下辺りにやはりビーズの付いたピンク色のベルトを纏（まと）
とってはいたが、その豊かな乳房を完全には隠せなかった
し、悩ましい腹部は大胆に露出されていた。

豊満な白い肉体の中央ではお臍（へそ）が揺れ動いていた。
ベルトの上にはピンク色のヒップスカーフがまかれ、そこ
は金色のコインが縫い付けられていて腰の動きに合わせ細
かく揺れ、キラキラと光っていた。

慎太郎は、その魅力に圧倒されていた。

敬虔なモスレムの地サウジでは、このような踊りを目にする
ことは無い筈だ。まるで、イスタンブールかカイロにでも
居るみたいだと慎太郎は不思議な気持ちでその妖艶（ようえん）
（ような）姿態に見とれていた。

いつの間にか、ダンサーの数は三人に増え、慎太郎の近く
に来て踊り始めた。

三人ともハイファ・ワハビそっくりだった。

慎太郎は、タブラの激しいリズム、ウードの響きに合わせ

て、顫動(せんどう)する腰と腹が次第に近づいて来るのを、まるでハーレムの中にいる王様のようにじっと見つめていた。

ダンサーは唇を半開きにしながら慎太郎に迫ってきた。その厚い唇が悩ましい。周りからの金、銀、瑠璃、琥珀、水晶の光が眩(まぶ)しい。

三人が慎太郎のすぐ脇まで来たところで、目が覚めた。

慎太郎は羽毛布団の中で、しばらく甘美な余韻に浸っていた。そして、どうしてこのような夢を見たのだろうかと訝(いぶ)かしく思っていた。

厳しい、単色のイスラム世界に入る前の、せめてもの名残に神様が慎太郎に眩(まぶ)しい天空の世界を見せてくれたのだろうか。

あるいは、何かの夢のお告げなのだろうか。

アル・ファイサリア・ホテルの客室は大層豪華で調度品はすべて超高級品が備え付けられていた。また、建設されてからそれほど年数が経っていないようで、欧州によくある古めかしいカビの生えたような暗いところは全くなかった。端々まで心地良かった。

入口の扉一つとっても、厚さ六センチはあると思われる無垢の木材で出来ていた。その扉は、落ち着いた茶色に彩色されていて、まるで金属で出来ているように堅牢で重く、これならテロリストから至近距離で発砲されても弾丸の貫通はないし、大きな斧で打たれても割れるようなことはないと思われた。何かが起これば、鍵を開けずに中に閉じこもっていれば良い。部屋の隅に置かれた机、椅子もすべて固い丈夫な純木で作られたものだった。椅子などもちよつと動かそうとすると重たくて閉口した。机は、とても一人で動かしてみる気にもならなかった。その椅子の一つでも扉の後ろに置けば、手榴弾など、そこそこの爆発物でも破壊することは出来ないだろう。テロ攻撃など何があってもおかしくないリヤドでは、

まず、そんなことを思い付いた。

洗面・バスルームの白く塗られた重厚な扉を開けると、正面の壁の上半分にはガラスが一面に張られ、その下には白い大理石の洗面化粧台が据えられていた。左手には一畳ほどの大きさの、シャワーの付いた白いバスタブがあり、右手にはガラス張りのシャワールームが別途設けられている。シャワールームは半畳ほどの広さだったが、透明ガラスの仕切りを隔てて洋式トイレが置かれていた。バスルームは、ふんだんに置かれている高級な石鹸、バス用ジェル、シャンプー、リンスなどのトイレットトリー（化粧用品）の芳香で充満していて、清潔な白いバスタオル、手洗い用タオル、ミニタオルもそれぞれ三枚ずつ用意されていた。

何から何まで綺麗(きれい)で正しく五つ星の超高級ホテルに相應しいものだった。居住性は申し分なかった。ここなら、いつまで滞在しても良いと思った。

慎太郎は、外交官時代から四つ星以上のホテルにしか宿泊したことが無かったが、このような豪華で快適なホテルは稀（まれ）だった。

彼は飛行機も三友商事ではビジネスクラスにしか乗ったことがなく、大層恵まれていた。ビジネスクラスの居住性は快適で、昨日もほぼ一日をかけて東京から香港へ、そして香港からバーレーン経由でリヤドへと飛んで来たが、それほど疲れは感じていなかった。香港でのトランジットでは、ビジネスクラスのラウンジでゆっくりと寛ぎながら、その又ードルバーでジャージャー麺、タン麺を味わってきた。機内でも、フランス・ボルドーの高級ワインと、とてもケータリングとは思えないほど美味で適量な中華料理のフルコースを楽しめた。搭乗の時にも、アナウンスに合わせて搭乗口に行けば良い。決して、エコノミーのように長蛇の列に並んで待つことはない。

アル・ファイサリア・ホテルの経営母体は、慎太郎の好き

な名君、ファイサル第三代サウジアラビア国王に縁(ゆかり)のあるファイサル・ファンデーション(基金)だった。それが、今回三友商事リヤド支店に頼んでこのホテルに予約してもらった理由の一つでもあった。

部屋は、取り敢えず自動車爆弾テロを考慮し、最上階の五階(サウジではだいたいヨーロッパ流に階数名が付けられている。日本で言えば六階)を注文していた。

もっとも、慎太郎の見た二〇〇三年五月の自動車自爆テロの写真では、大型爆弾により地面には五メートルに及ぶ穴が出来ていたし、多数のバルコニーが吹き飛ばされ、窓は完全に破壊されていた。従って、至近距離で自爆テロがあれば、最上階でも安全かどうかは疑わしかった。

このホテルのセキュリティからすれば、車両が建物の直ぐ脇まで近寄ることは難しいとも思えたが、何が起こるか分からない。慎太郎は、常々一〇〇%安全と言うことは無いと思っていた。特に、特攻隊の自爆テロリスト九人は全員黒焦げとなって死んでいたというが、このような死を厭わない攻撃

を阻止するのはかなり難しい。

それでも、最上階に宿泊すると言っつのは多少の気休めにはなつた。

五月の自爆テロでは、七人の米国人の他に一四人の居住者が死亡した。その内訳は、スイス人一人、オーストラリア人一人、レバノン人一人、フィリピン人二人、ヨルダン人二人、それにサウジ人七人だった。爆風の威力は凄(すさ)まじく、窓ガラスは粉々に碎けて飛散し部屋の中の家具まで吹き飛ばした。そして、飛散したガラスの破片が多数の居住者を傷つけた。

リヤドの街は一〇年前とは全く変わっていた。

ホテルの部屋の窓からは遠くキングダム・タワーが見えた。このキングダム・タワーは高さ約三〇〇メートルでアル・ファイサリア・ホテルに隣接したファイサリア・タワーと並んで新しいリヤドのシンボルとなっている。東京駅前に聳(そ)びえる丸ビルが高さ一七〇メートル、日本で最も背の高い

ビルである横浜ランドマーク・タワーが約二八〇メートルだから、これらを優に凌駕(りょうが)している。

彼が前回赴任した時にはこのような巨大な建造物はなかった。この辺りにはファイサル・ファンデーシヨンの本部ビルと、やはりこのファンデーシヨンが経営母体となっているアル・コザマ・ホテルが目を引きたくらいだった。当時は、両者とも巨大だったが、その脇に新たに建てられた巨大複合施設“ファイサリア・コンプレックス”には、質量ともに遠く及ばなかった。ファイサリア・コンプレックスの中心はグローブ(地球)と呼ばれるまさしく地球の形をした展望レストランを塔頂に擁(よう)した約二七〇メートルのタワーだった。下には三〇階建ての事務所ビル、四階まで吹き抜けになっているガラス張りの大ホールがあった。それに、このアル・ファイサリア・ホテル、三万三〇〇〇平方メートルのスペースに約一〇〇〇の店舗を有する四階建ての商業施設ファイサリア・モール、そして超高級の賃貸マンション、ファイサリア・レジデンスから構成されていた。

しかし、慎太郎は、ファイサル・ファンデーシヨンの建物群の方が気に入っていた。それは、ファハド大通りに面した、高さおよそ六五メートルの、丁度本を広げたような形をしたビルと、その裏の本部ビルそして近代的なモスク、さらに、モスクの裏側のアル・コザマ・ホテル、アル・コザマ・センターから成っていた。この建物群は一九八二年から一九八五年にかけて丹下健三の設計により建てられたものだった。本部ビルには貴重なイスラム文化関連の本が沢山納められていた。付近には文化的香りが漂っている。慎太郎が宿泊しているアル・ファイサリア・ホテルの部屋の窓からは、道を一つ隔てただけのこれらの建物が良く見えた。

慎太郎は、ベッドを離れると、その懐かしいお気に入りの風景を眺めながらゆっくりと椅子に腰掛けた。そして、昨晩空港まで迎えに来てくれたリヤド支店の笠原からもらった書類に眼を通し、この日の予定などのチェックを始めた。

昨晚、笠原は今日の昼頃に迎えに来ると言っていた。ゆっくりと疲れをとって欲しいという気遣いであろう、その通り午前の予定は全くなかった。

慎太郎は、くつろいで朝食を食べ、身支度をして待っていたら良かった。幸い、今はラマダン(断食)月で朝食はルームサービスで頼まなければならなかった。

慎太郎は、旅慣れていたし英語に不自由はなく、リヤド事務所にとっては世話の要らない有り難い客だった。

ラマダンは、個々のムスリムが個人として直接神に対して負っている五つの義務(五行、もしくは五柱)の一つである。他の四つは、シャハーダ(信仰告白)、サラート、ザカート(喜捨)、ハッジ(巡礼)で、ひととき厳格なイスラムの国サウジでは、全ムスリムがこれらを厳格に実践している。

コーラン(厳密にはアル＝クルアーン)には、ラマダンを実践すれば、真に神を畏(おそ)れかしこむ気持ちが出てくると記されている。また、ムスリムは、ラマダンを飢えた人の苦しみを思いやり、自己の欲望に打ち克つための試練とも考え

ている。

今はこのラマダンを実践する月、神聖なる月だった。この神聖なる月には過激なイスラム思想を奉じるテロリストの攻撃が活発になることから、外国人からは危険な月として畏れられていた。

ラマダンの時は、普段とは全く異なる暮し向きとなる。ただ、断食と言っても、僧侶の修行やハンガーストライキとは異なりずっと全く何も食べないというわけではない。

太陽が出ている間、即ち、日の出から日没までの断食である。それでも一カ月間ほど続くので容易なことではない。分かりやすく言えば、朝、昼抜きで一カ月間過ごすと言ったところだ。この間、水も飲んではいけない。厳密にはつばも飲み込んではいけない。

その代わり、日が沈むと皆一斉に食べ始め、商店など全ての活動が再開され街は活気を帯びる。夕方から夜まで働いた後には大パーティーが開かれる。地域、家庭によりまちまちだが、その日の断食が終わると近所の知り合いなどを交え、

そうとう夜遅くまで飲んだり食べたりしながら話しを続ける。午前二時までなどは普通だ。

会社勤めでない個人商店主などは午前六時頃までそれを続けるものもいる。そんな人は、その後だいたい昼頃まで寝ている。まるで夜行性の動物みたいだ。勿論、夕食前の昼寝はラマダンに係わりなくいつでも必須だ。

それで、ムスリムは、ラマダンの日中には、一様に眠そうで疲れているように見える。皆早く帰宅することを考え、気もそぞろで仕事をしている。ラマダンの間は、銀行も含め、どの会社も昼の勤務時間を短縮する。

経済活動は鈍化し、仕事の能率はかなり落ち込む。

慎太郎は、その眠そうなサウジ人の多いロビーへと降りていった。

笠原は、既に彼の来るのを待っていた。

「おはようございます。昨晚はゆっくりお休みになれましたか。お疲れではなかったですか」

笠原は、大きな本皮のソファアールから立ち上がって、慎太郎

に訊ねた。

「おはようございます。時差ぼけで夜中に一度目を覚ましただけで、ぐっすりと眠れました。笠原さんのお蔭で疲れは全くありませんね。昨晩は、空港までの迎え有り難うございました。この国では、本当に助かります」

慎太郎は、丁重に、昨晩の礼を言った。

笠原は、事務所に向かう前に、ロビーで簡単にサウジ、リヤド事情、石油、天然ガス事情、今後のスケジュールなどを説明したいと言うので、慎太郎は、笠原と向かい合ってソファーに座った。

慎太郎は、笠原を初めてまじまじと見たが、笠原は、社マンというよりも学者風で、色白の、線の細い生真面目そうな人物だった。黒縁の眼鏡が一層それを際立たせていた。スラリと背が高く、まだ、若いせいか、細身だった。

笠原は、資料に基づき説明を始めた。記憶力抜群の慎太郎

は、今朝読んだばかりのその資料の内容を完全に憶えていた。

一通り笠原の説明を聞いた後、慎太郎は、

「説明有難う。それでは、幾つか疑問点があるので、聞いても良いですか」

と訊ねた。

「ええ、何でも、どうぞ・・・」

と言いながら、入社三年目の若い笠原は不安そうだった。

一〇数年前とは言え、慎太郎は笠原より長い間、このリヤドに滞在していた。また、三友商事リヤド支店は、アルコバル支店とは異なり、石油、天然ガスを直接担当してはいない。笠原は、いつも日本から来客があると、その概要について俄(にわ)か勉強をして一通りの説明をしなければならなかった。リヤドのこと、石油問題などを詳しく質問されたら困ると思っていた。

「さつき、君は、日本大使館が、先月中旬に、米大(在サウジアラビア米国大使館)のワーデンメッセージ(危険通知)をもとに、キングダム・タワーとファイサリア・タワーがテロ

の標的となっているので、当分の間、可能な限りこれらの施設に近寄らないように注意喚起をしたと説明しましたね。僕は、それを知らずに、自分の好みで、リヤド支店に、テロリストの攻撃対象になっているタワー脇のこのホテルに予約を頼んでしまいました……」

笠原は、慎太郎が、笠原に聞くのが最も適当な治安関係の質問をしそうだったのでホツとした。途端に、若い笠原は、その質問を待てずに、喋(しゃべ)ってしまった。

「申し訳ありません。リヤド支店としては、池波さんが全てご承知の上のことと勝手に思い込んでいました。池波さんが手配を依頼して来られた時に、当方から詳しくご説明するべきだったかもしれません。……申し訳ありません」

笠原は、慎太郎が不満を言うのではないかと早合点して、二度も謝った。

「笠原さん、僕は、不満を言おうとしたわけではありません。僕の方から問い合わせをするべきだったのでしよう。こちらこそ済みません」

慎太郎は、思わぬ方向に話が行って戸惑っていた。

三友商事は、大商社でその規模からすると普通の会社が幾つか集まったようなものだった。所属する部が異なると互いにほとんど面識はないし、指揮命令系統の異なる部との意思疎通は困難だった。大袈裟に言えば、部が異なると別の会社の人と接しているような疎遠な感覚がある。会話もよそよそしい他人行儀のようなものとならざるを得なかった。つい、気を遣い過ぎてしまう。さらに、今度の慎太郎のリヤド長期滞在は、特命という性格上、全てがオープンになるわけも無かった。これから先が思い遣られた。

慎太郎は、当分の間、言わばリヤド支店の居候だった。指揮命令系統からすれば、本来は、東部油田地帯にあるアルコバル支店の傘下に入ることになる。

笠原は、立て続けに喋り始めた。

「リヤド事務所では、このアル・ファイサリア・ホテルに来ることは良くあります」、

「日本大使館の注意喚起は文字通り注意喚起です。それに可

能な限りということ。サウジ石油省を始めとするお役所もこのホテルを良く使っていますし、このホテルに来ないと仕事になりません」、

「池波さんのようにこのホテルを気に入っている日本人は多いです。日本からの予約依頼は引きも切りません。このホテルのセキュリティ体制は万全です。タワーとホテルは別ですし……」

慎太郎を安心させようと、次から次へと笠原の口から出て来る懸命な説明を、慎太郎は静かに聞いていた。

すると、笠原は不用意にも、

「それに、このあいだは、治安部隊がタワーを狙ったと思われるテロリストをこの付近で逮捕して、無事、テロを未然に防ぐことが出来ました」

と言ってしまった。

笠原はすぐに自分が余計なことを言ってしまったことに気が付いたが、後の祭だった。

「そうですね。実際、ファイサリア・タワーは狙われていたのですか。ニューヨークではテロリストが米国の象徴とも言える世界貿易センタービルに旅客機ごと突入しました。サウジの象徴とも言える、キングダム・タワーやこのファイサリア・タワーに同様の攻撃を計画するテロリストもいるのではないかと思ってはいました。しかし、このファイサリア・コンプレックスの建設にはビン・ラディン・グループが関与したと聞いていたので、ファイサリア・タワーへの攻撃については有り得ないのではないかと思っていたのです。これから考えを改めましょう」

慎太郎は、テロの攻撃対象となっているファイサリア・タワーの至近距離に泊まることになった運命の皮肉を感じていた。

「君の説明で良く分かりました。しかし、どこにいても〇〇パーセント安全ということはないと思っています。当面はこのホテルに滞在することにしましょう」

そう聞いて、笠原は落ち着きを取り戻した。

その笠原の表情を見ながら、慎太郎は、続けてリヤドの最近の治安状況に関して幾つかの質問をした。質問に対する笠原の答えは、懇切丁寧で、慎太郎は、より詳細に治安情勢が把握出来た。

五月のコンパウンド爆破事件では、テロリスト達がコンパウンドの奥深く侵入してから自爆したため、四〇〇戸以上に及ぶ住居のほとんど全部の窓、ドアが吹き飛ばすなどの大損傷を受けたとのことだった。米国も、米国人が七人も殺害されたことから、この事件を重視してFBI捜査官を五〇人以上派遣してサウジの治安体制も含め綿密に調べたという。

笠原の答えには慎太郎の知らなかったこともあったが、いずれも、慎太郎がこれまでに調べたこと、考えていたことから大きく離れたものでは無かった。

しかし、一層心を引き締めて生活しなければならぬと思っ

「今回はいろいろとお世話になります。ご承知の通り、いつまでの滞在になるか、まだ、はっきりしていません。取り敢えず六カ月間くらいの住家を確保したいと思っています。ラマダンという動き難い時ですが、君からアドバイスをもらいながら、リヤドを回って見たいと思っています。宜しく」

最後に、そう言って、慎太郎は笠原との打ち合わせを締めくくった。